

<第 38 回学会大会 シンポジウム>

“地域興しの手法としてのレクリエーション” 再検討

— 新潟市における諸事例から —

シンポジスト

田村 貢<sup>1</sup> 西原康行<sup>2</sup>  
池 良弘<sup>3</sup> 上山 寛<sup>4</sup>

コーディネーター

小田切毅一<sup>5</sup>

“Recreation as a method of community promotion” reconsidered :  
With reference to some cases in Niigata city

Mitsugu Tamura<sup>1</sup>, Yasuyuki Nishimura<sup>2</sup>  
Yoshihiro Ike<sup>3</sup>, Hiroshi Kamiyama<sup>4</sup>  
Kiichi Otagiri<sup>5</sup>



- 1 アルビレックス新潟 Albirex Niigata Corporation
- 2 新潟医療福祉大学 Niigata University of Health and Welfare
- 3 日本福祉医療専門学校 Japan Welfare Treatment College
- 4 上山寛アトリエ Kamiyama Hiroshi Atelier, Architect
- 5 新潟医療福祉大学 Niigata University of Health and Welfare

## 1. 提案主旨

**小田切毅一**：それでは時間になりました。シンポジウムを始めさせていただきます。

このシンポジウムでは地域興しの「手法としてのレクリエーション」の有効性について考えていきたいと思っています。

最初にテーマの「地域興し」という表記についてですが、鈴木会長が（学会誌 61 号）の冒頭で、「地域おこし」と記されている点が気になりました。そこで広辞苑などに当たりましたら、「興る」という項目はありますが、「興し」もしくは「地域興し」という、いわば名詞形の項目はありませんでした。したがってテーマはむしろ「地域を興すレクリエーション」とした方が馴染むとも考えた次第です。けれども言葉の現代的な用例としては、市民権を得ていると考えて、このシンポジウムを進めさせていただきます。

さて私からは、「提案主旨」のようなことを申し上げます。はじめに地域興しにレクリエーションが有効であるとする場合のこの「レクリエーション」は、何よりも活性化させる地域を拠点とした人的交流のコミュニケーション・ワークのことであると考えています。商業的収益とか経済的効率といった実利性が最優先されるのではなく、仲間と共に喜び協力し合うコミュニケーション・ワークが目指されるという意味で、満足感や幸福感に通じる創造的生きがい行動と考えました。（「大会号第 61 号」11 頁）

新潟というところは地域興しが様々な手法を伴って行われている地方ではないかなと思っています。何故新潟は地域興しが盛んなのだろうかと考えていきますと、なによりも新潟固有の土地柄があります。大都会における消費型社会の雑踏とは違う土地柄があるのです。以前に D. リースマンが『孤独な群衆』という有名な本を書きましたが、まさに大都会における他者指向（人並指向）な、それでいて「隣は何をする人ぞ」といった風の人間関係の中で、欲望だけは満たされる便利な生活空間があるといった具合の、そういう都会型とは異なる土地柄のせいかな、と思ったりしています。

たとえば新潟市は「田園型政令都市」という性格づけがなされています。あるいは雪に閉ざされ

る新潟とか、大学生など若年層の県外流出が顕著な新潟とか、そういう諸々の新潟の性格が、地域づくりを必要とさせるニーズのようなものになって、それが地域興しをさせているんじゃないかと感じております。先日もテレビで中越沖地震を体験した小地谷地区の情報が流れていました。地震で何も無くなったけど、やはり此处には友人や縁者もいる、慣れ親しんだこの土地が良いと、顔を輝かせながら語る高齢者の方々が報じられておりました。まさにそういうコミュニケーション力の中から生きる力が、そして地域興しが再生されると確信しました。

話は変わりますが、昨今の時節柄なのでしょう。公務員の無駄遣いのニュースが流れています。色々「けしからん」といってレクリエーション費の使用状況が取り沙汰されていますね。レクリエーション費を歴史的に見ると、第二次大戦後に、占領国アメリカの指導をうけて、まずは公務員から率先して民主的な日本興しをしようとした時代の名残でもある訳です。その名残が問題になるのには、時代の「節目」のようなものを感じます。

それゆえに、新たなレクリエーションの運動的ありようとして、地域づくりのような働きかけが話題にならないか、というのがこのシンポジウムの提案主旨なのであります。本日は、この提案に賛同してくださった、4 人の方々が、それぞれのお立場から話題を提供していただきます。

はじめに、アルビレックス新潟株式会社の田村貢さんをご紹介します。田村さんは、現在は常務理事という肩書きですが、私は 1 週間ほど前でしたか、「新潟日報」の報道で、来年早々に社長に就任されることを知りました。まさにアルビレックスの運営やファン・サービス、アルビレックスによる地域興しを先導するお立場にある方で、今後ますますそう期待される立場にある方です。本日は「アルビレックス新潟における地域興しの実践から」と題して、お話しを伺います。

## 2. 話題提供

**田村 貢**：アルビレックス新潟の田村でございます。皆さんアルビレックス新潟ってご存じでしょうか。ご存じの方、恐縮ですがお手を挙げ下さい。（会場の大多数が挙手）ありがとうございます。

これで大分気持ちよくお話しが出来ます。(笑)

アルビレックスというサッカーチームですけれども、このチームは元々ワールドカップを新潟に招致するところから出発しました。そして現在は、このチームを年々強化していく途上にある訳です。プロとして発足して13年目になります。レクリエーションの観点からしても、サッカーとは自らが参加してプレーをするだけのものではありません。家族や仲間とともに、最頂のチームや選手を大合唱で応援する「観るスポーツ」ということにもなります。

スタジアムを埋め尽くす大観衆は、「おらがチーム新潟」に大声援をおくります。日本海に面した雪深い街、日ごろは穏やかな新潟県民がオレンジ色のユニフォームを纏い、「アイシテル ニイガタ!」と熱狂します。アルビレックス新潟のホームスタジアムの東北電力ビッグスワンは、いつも熱気に包まれ、雪国の街というイメージからかけ離れた異空間がそこに生じます。

まずはこのアルビレックスが、どうやって今日に至ったか、簡単なVTRをご覧くださいませ。

#### <アルビレックス新潟の歴史(VTR)>

アルビレックス新潟の誕生は、2002年のFIFAワールドカップと深い関係があります。1991年に日本がホストカントリーとして、FIFAワールドカップの誘致に立候補し、日本サッカー協会から全国に開催都市の募集が行われた折、新潟県は招致活動を行うためワールドカップ招致委員会を発足させました。1993年に北信越サッカーリーグを戦っていた地元アマチュアクラブチームの新潟イレブンサッカークラブを強化指定し、支援を実施しました。地元経済界でも県内企業(民間)の有志が、後援会を組織し支援を開始しました。

1996年に株式会社アルビレオ新潟を設立、翌年の1997年にアルビレックス新潟と改称、Jリーグを目指すチームとしてスタートしました。FIFAワールドカップの招致には、大会終了後も地元のサッカー文化(Jリーグチームによる)を継承するという暗黙の開催立候補の条件も存在しました。FIFAワールドカップ招致では1996年の暮れに、最後の最後に愛知県との激戦の結果、念願の開催地決定という目標を達成しました。しかしチームはこの年の北信越サッカーリーグで優勝

したものの、JFL(ジャパンフットボールリーグ)への昇格をかけた全国地域リーグ決勝大会の予選リーグで敗退してしまいました。全国地域リーグ決勝大会をなんとか準優勝しJFL昇格を果たしたのは、翌年1997年のことでした。折しも会社の財政状態は、3年連続アマチュアリーグで運営していたこともあり、債務超過寸前まで陥っていました。そのため増資を重ね経費を見直し、地元メディアも大きく取り上げるほどの大幅なリストラを敢行せざるを得ませんでした。FIFAワールドカップの開催が決定したものの、地元チームは存続の危機にありました。

1999年にJ2リーグが開幕。リーグ自体はプロとなったが、参加チームのほとんどがJFLから昇格したチームで、観客動員も年間平均4,000人程度と、決して盛り上がりませんでした。アルビレックスは経営面では、後援会の組織を全県下に組織していくなど、様々なアイデアを出しながら健全な経営を目指し、この年から黒字経営に転向しました。2001年にホームスタジアム(ビッグスワン)が完成し、翌年に開催されたFIFAワールドカップもメディアが取り上げたことなどで、徐々にサッカーに対する気運も盛り上がりを見せました。しかしこの年のJ2リーグの開幕戦でも観客は5,546人でした。

1ヶ月半後の2001年5月19日、J2第12節のアルビレックス新潟VS京都パープルサンガ戦は、観客数確保の経営戦略からみて、大きなターニングポイントとなりました。「平均観客動員4,000人のチームを1ヶ月半後に10倍の4万人にする。」シーズン前から、新潟県にビッグスワンの4万人収容のスタジアムを満員にするを目指し、大規模な無料招待が実施されました。そして当日は、4万人には満たないものの、31,964人もの大観衆が来場したのです。それ以後もビッグスワンでの4万人を目指す無料招待が継続されました。ちなみにこの年は、年間の平均観客動員16,659人と、ちょうどJ1の平均16,548人に並ぶ数字に到達しました。

2002年には、待望のFIFAワールドカップが開催され、大変な盛り上がりとなり、新潟でもベッカムやオーエンのプレーに酔いしれ、その熱狂がそのままアルビレックス新潟に流れ込みました。

アルビレックス新潟自身も、2001年から毎年J1昇格争いをするJ2の強豪チームに成長しましたが、2003年には遂にホーム最終戦で4万人のサポーターの目の前でJ2を優勝し、J1昇格を決めました。スタジアム全体が、感動で涙を流し抱き合った瞬間でした。

サポーター達に関しては、当初はあまりサッカーに興味のない観客が8割以上もいましたが、2度、3度とスタジアムを訪れるようになって、毎試合満員のスタジアムで「おらがチーム」に声援を送るように変化しました。選手達もその応援に後押しされ、潜在能力を十二分に発揮し、最後まで走り抜く粘り強いサッカーで観衆を魅了するようになりました。多くの観戦者は、ただ単にサッカーを観戦するだけでなく、共通の想いを持つことで家族との絆が深まり、新しい仲間と出会いました。こうした小さなコミュニティがスタジアム全体を埋め尽くし、連帯感や一体感が生まれ、満員のスタジアムが熱狂に包まれました。地域興しはこのような、多くの地域の人々の手によって、地域のアイデンティティをつくり育てることから出発するのです。

アルビレックス新潟では、スポーツが健康な体づくりや、人々に夢や活力を与えるものであるとともに、青少年の健全な育成に寄与するものであると考え、「Jリーグ百年構想」のスローガンのもとに、地域スポーツの振興活動を積極的におこなっています。具体的働きかけとしては、少しでも親しみを抱いていただくために、毎日のように幼稚園や保育園を巡回し、園児たちにボール遊びを教えています。また、新潟県や新潟市その他の市町村と連携し、小学生や中学生を対象としたサッカー教室やフットサル大会など開催して地域とクラブとのコミュニケーションを図っています。監督や選手達も、サポーターに丁寧な心を込めてサインをしています。そういう活動を地道に積み重ねていくことが、チームを支援するサポーターの増加に繋がっています。

さらにサッカー以外のスポーツでも、競技の普及やレベルアップに取り組んでおり、アルビレックス新潟には、男女のサッカーチームのほかに、別の法人組織として、チーム名称『アルビレックス』を共有したバスケットボールの新潟アルビレ

ックスBB、チアリーディングのアルビレックスチアリーダーズ、スキー・スノーボードのチームアルビレックス新潟、陸上(短・中・長距離走)の新潟アルビレックスRC、野球独立リーグの新潟アルビレックスBCが存在しています。これらの競技のほかにも、アルビレックス新潟が主催してゲートボール大会等を定期的に開催しています。こうした活動により地域に「豊かなスポーツ文化」が生まれ、スポーツが楽しみになり、スポーツがきっかけで多くの友達ができ、応援するチームが地域のアイデンティティとなります。地域の人々が様々なコミュニティを形成し、地域におけるコミュニケーションの輪を広げることを目指しています。

ところで観客が増加するにつれて、会場に残されるごみの量も年々増加します。そこで環境問題への取り組みがなされるようになりました。1試合およそ3トンで車両6台分のごみが出ます。会場では、以前から「燃えるごみ」と「燃えないごみ」の2分別を実施してきましたが、なかなか守られませんでした。また安全管理の目的で、びん・缶の持ち込みは禁止されていますが、残念ながら持ち込まれ一緒に捨てられている状況でした。2003年の実態調査によると、約80%のごみが持ち込みでした。そこでスタジアムの開門前にサポーターに「ごみの持ち帰り」を呼びかけたところ、ごみが約22%も減少しました。同時にごみを、ペットボトルを加えて3分別するようにし、うまく運営されるようになりました。さらにユニホームスポンサーでもある亀田製菓(株)の社員の方々やサポーターの有志が中心に「クリーンサポーター」となって、試合後の会場の清掃を積極的に行うようになりました。2005年からは飲み物販売をリユースカップに変更したことで、紙コップ年間22万9,300個(4.01t)分、CO<sub>2</sub>にして22.7tが削減されています。

このように積極的に地域の人々と環境問題等に取り組む、これからも多くの人たちが使用するスタジアムやクラブハウス、練習グラウンドを清潔・快適で安全な施設にし続けたいと考えています。

< VTR 終わり >

VTRをご覧いただきましたが、当初は、本当に土のグラウンドでドロドロになりながら、選手も

アマチュアとプロとが入り交じってやっていました。サポーターの数も数百人というところから出発しました。それが2001年にスタジアムが完成し、翌年のワールドカップの盛り上がりがあった頃から、アルビレックスは大きく変わってきた訳です。

VTRにも、お父さんと子どもさんとの、まあ家族のエピソードのような場面がありました。やはりチームを支援する会話で家族の絆が深まったり、同じ共通の思いをすることによってコミュニケーションの場が保たれ広がっていくといったことが、大きいのかなと思っています。アルビレックス新潟は、ファミリーでの観戦者が多いことも特徴で、オレンジのユニフォームを着て、一緒に歩いている親子、まるでカルガモのように、お父さんとお母さんの後ろに子供たちが列になって自転車スタジアムを目指し走って行く光景などが見られます。おじいちゃんとおばあちゃんが手をつないでスタジアムに歩いてくる姿も、とても微笑ましい。そんな情景がずっと続いていくことを、アルビレックス新潟は目指しています。

私どもは直接的には「見るスポーツ」を振興させ、実践している訳ですが、この実践する事によってさらに「するスポーツ」への誘導ですとか、コミュニティの形成などにも、少なからず寄与出来ていると自負しています。またサッカーだけではなく、組織は別になりますが、同じチーム名を共有してのバスケットボールや野球や陸上競技といった、色んなプロスポーツのチームを広げ盛り立てていくことも、今後のひとつの地域興しの鍵となるのだという風に考えています。

**小田切毅一**：どうもありがとうございました。VTRに登場しておりました池田会長は、私の大学の理事長でもありまして、そんな関係もあり池田さんがお書きになった自伝風の本をいただき、読ませていただきました。あの方の出身は、新潟市の古くからの中心地であった古町（いわゆる「新潟島」の中心）です。でも近頃は、駅やバイパスや高速道路などとの関係や、それに郊外型の大規模店舗などに押されて、訪れる人の数が減って空洞化傾向にあります。このことを嘆いておられました。また視野を広げた際の新潟県が、たと

えば若者人口の大都市への流出傾向を止められないこと等についても同様で、地域興しのモチーフが明確に述べられていました。アルビレックスの事業は、まさにこうした地域興しの中核的事業と位置づけておられたということも、理解した次第です。

さて次に話題を提供してくださるのは、新潟医療福祉大学の西原康行さんです。「生涯スポーツの拠点、総合型地域スポーツクラブにおける新潟的地域興しを問う」というテーマでお話いただきます。

**西原康行**：まず冒頭にひとつ。私に与えられたテーマに「新潟的地域興しを問う」と表記していますのは、私が必ずしも総合型地域スポーツクラブが、新潟的な固有の地域興しを促進させるものではないと考えていることによります。むしろ反問する立場を反映させた表記だということを、あらかじめ明白しておきたいと思います。

さて、初めに新潟的な地域興しとかかわる固有な風物を挙げてみます。まずは長岡の花火です。次は佐渡島の佐渡おけさですか、たらい舟なども有名です。新潟市からジェットフォイルで約一時間の場所にありますが、むしろゆっくりフェリーで行く方を私はお薦めします。歴史的にも魅力満載の佐渡へ是非お出かけ下さい。この島では永年保護されてきた朱鷺が今年放鳥され、野鳥にもどりました。放鳥にあたっては朱鷺の食生活ともかわかって、農業を使わない田畑など、自然環境をまもる地域整備の話が深く関わっております。3つ目は、山古志の牛の角突きです、一種の闘牛のようなものです。4つ目は雪像です。主に十日町とか六日町とか南魚沼などの雪国で行われている雪祭り、これを「ほんやら洞」と言います。子ども達が中でお餅をたべたりしていますが、その雪祭りの様子です。

これらの新潟的風物の特徴の中で、地域のスポーツクラブでは「新潟的」という要素が本当にあるのでしょうか。スポーツでそういう地域興しができるのでしょうかという、2点を意識しながら考えてみたいと思います。

実は地域総合型スポーツクラブの構想は、2000年9月にスポーツ振興計画というのが文部科学省

から出されまして、2010年までに各市町村に一つずつ設けましょうという意向の中で登場してきたものです。現在では、おそらく全国で1,900ぐらいある市町村の内1,000ちょっとに、この種のクラブが出来たということでしょうが、いわゆる「光と影」があって、半数のクラブはおそらく上手くいっていないのではないかとも思っています。

この総合型クラブが出来た背景というのは、ひとつはスポーツを取り巻く環境である国民の運動能力や体力の低下であり、少子高齢化が進行する地域の社会問題ともかかわっております。勿論学校スポーツというのはいまだに有効に機能している訳ですが、学校スポーツを補う地域のスポーツの振興が必要であり、また多様化するスポーツへのニーズに応えようとしたものでもある訳です。

それからスポーツをする子としない子との二極化ということは、先程の森川先生の基調講演でも話題になりましたが、そうした現実があります。それから少子化が進むとチームスポーツが組織出来なくなる、顔が揃わなくなるというような状況も無視できません。また高齢者の医療費負担の軽減というような政治課題もありますので、スポーツやレクリエーションを通して健康を保持することが必要になります。地域の小さな子どもが犯罪に巻き込まれることを防ぐためにも、地域の間関係の弱体化を補う上でも、総合型地域スポーツクラブでコミュニティを形成して欲しいということになるわけです。色々な側面から、今の社会の問題をクリアするための期待がかけられている訳です。

次に総合型地域スポーツクラブのイメージについてですが、まず色々なスポーツ種目があって、どの種目でも上手な人も下手な人も一緒にやってみようという理念があります。あるいは老若男女とか年齢を超えた参加者によって実施されるとか、地方によってはその地方で盛んな種目、たとえば新潟でしたらスキーとかスケートといった種目にも取り組んでいこうとか、まさに住民が主体的に参加するために日常生活圏に必要なものであるといった理念をきちっと持ってくださいと言う事柄が挙げられます。新潟の場合ですと、この会場から自動車でおよそ30分ぐらいかかる

距離の場所にクラブが1つあります。同じ新潟市ですから文部科学省的に言えば、「市にひとつ」という条件は満たしてはいます。しかし市の中心部の人では参加できません。広い新潟市という、合併にかかわるこういった点の矛盾はあります。

ここでは、新潟市とその近郊に開設されたクラブの幾つかにも触れてみようと思います。まず新潟市の豊栄という場所に「ハピスカ豊栄」というクラブがあります。ソフトバレーボールだとか卓球だとか、グラウンドボールのような多様なスポーツが実施されています。次に新潟近郊の三条にある「りんぐる」というクラブです。このクラブ名はみんなが輪になって、グルになっちゃおうという意味からきています。先程のハピスカ豊栄もそうですが、私の学生もこの活動に参加して、子ども達と一緒に遊ぶなどしています。続いて「南魚パラダイス」という八海山（お酒で有名な、八つの峰が連なる山）の麓の南魚沼地区のクラブです。ここではマイタケで有名な企業もあり、単に営利目的ではなくて理念がしっかりした運営がなされています。

クラブの資金繰りに関しては、地元のスポンサーとの関係にも注目すべきです。たとえば代行業と居酒屋さんのスポンサーが、いわばセットになって機能しています。交通機関が専ら自動車に限られるこの地の特徴ある関係を形成しています。他のクラブでは、たとえばスポンサーとしての理髪店があげられるかもしれません。クラブに入っている子ども達がこの理髪店にいったスポーツ刈りになるといった関係などが出来ているようです。

こうみてもほとんど事業として経営努力のためにやっていることは、どのクラブでも皆同じだと言えます。だから「新潟的」というのは、事業的に考えると、「無い」と言えると思います。もっと広く世界に視野を広げて、総合型クラブの発祥の地とも言われているドイツの事例に注目してみます。これは、私も5年ぐらい前から時々訪れて調査したり、資料を得ている、百年の歴史がある名門のユーリッヒのクラブです。これは若者達がサッカーをやっている写真です。このクラブはすでに1910年に出来ています。このクラブの場合をみても、多少マンネリ化している傾向がみ

られます。言うまでもなくドイツでは、日曜日には教会にいくのと同じように、地域の中にクラブがあるのが当たり前になっています。伝統の中で誰が主体者であるかについても、すでにマンネリ化傾向にあるようです。多少は高齢者を意識したクラブですとか、子どもを中心に考えているクラブですとか、競技者を主な対象としているクラブですとか、規模の違いによる個性のようなものはあるようですが。

先程の「南魚パラダイス」の場合は、こうした事例に対応させてみると、高齢者を主な対象にしているようです。また平日の昼の施設の稼働率が高くなっています。主婦の方がヨガをしたり、サッカーを85歳の高齢者が頑張っています。

さて、どのクラブも事業としては何処も一緒で、まさに金太郎飴的なのですが、どうすれば住民の自助努力でやれる、主体的にやれる理想的なクラブになりうるのでしょうか。私が調査したところによりますと、クラブマネージャーのリーダーシップや慣習性がこれと関係しています。加えて会員とスタッフとの関係性（コミュニケーション）が、さらには大学などの地域資源が、主体的なクラブをつくる上で重要かと考えています。

では新潟的なクラブの特徴、慣習性や関係性にかかわる特徴とは何でしょうか。新潟においては、クラブを創る前は非常に慎重だという一般的傾向があります。しかし一度創ってしまうと新潟の場合は、比較的安定した状態を保っています。何故安定するのかという理由なんです、それはおそらく、この土地の永年の風土のようなものと関係しているのかもしれませんが。冬の暗い季節を乗り越えて雪が解けて春を迎えて、夏は日本海が非常に綺麗です。秋の田んぼの収穫があって、それが一気にダークな世界に入るといって、非常に明確な四季折々の変化がその一つだろうと思っています。

新潟の人達の人間性には、歴史性や地域性によって育まれた、身体に刻み込まれた身体としての「ハビトゥス」があるのではないかと考えています。「ハビトゥス」というのは、ブルデューが言っている言葉ですが、一種の慣習行動のようなものです。たとえばクラブのスタッフの顔を見ても、新潟人の風采とか風貌と言ったものが感じられる

ように思います。「ハビトゥス」を通して、新潟的というべき人と人との結びつきが創られ、新潟的という地域興しが創られるのではないのでしょうか。たとえば新潟人の外から来た人々へのウェルカムな文化というか、その開放的受け入れ態度ですとか、これも地域興しに深く関わっているのではないのでしょうか。あるいは先程田村さんが述べたサポーターが盛り上がっているというアルビレックスの事例にも、一度新潟の人が熱中すれば、燃え上がり、その深みに入り込み続けるという点で、この関係が明白かと思っています。アルビレックス新潟の今年の観客動員数は、J1リーグの中で第2位を占めてそうですが、このことでも明らかです。

おそらくはこの種の歴史性や地域性を反映した「ハビトゥス」については、東京なんかですと「粋な」江戸前の雰囲気であったり、あるいは大阪であれば本音的な語りの対応行動、さらに京都であれば「たてまえ」的行動として特徴づけられてきたものかもしれません。こうした人となりのようなものが、地域をつくってきているのではと考えております。

**小田切毅一**：どうもありがとうございました。「文部省のいう総合型地域クラブは、各市町村に必ず1つずつは設置するという画一的制約の中で設置されたクラブです。だから『新潟的』という個性を見出すのは、なかなか難しいんだ」と、この間私にもつぶやいておられたことを思い出しながら、興味深く拝聴させていただきました。

会場の皆さんは、県民論とか風土論のようなものにも接近させた、只今の西原さんの発言に、どう反応していただけるでしょうか。後の質疑応答を待ちたいと思います。

さて現代は、福祉社会だとか、高齢化社会だとか、あるいは介護の時代だとか種々言われております。レクリエーションの分野でも、生涯スポーツと言う一方で、福祉レクリエーション・ワークにも関心が高まってきました。こうした意味で、日本福祉医療専門学校の池良弘さんに登場していただき、福祉レクリエーション・ワークという立場から、特に本日はハンディキャップ・レクリエーションに携わってきた貴重な経験からお話しを

伺いたいと思います。テーマは「ハンディキャップ・レク、障がい者主体の文化による地域興しの試み」です。

池 良弘：ただ今の西原さんの話と関連したところから入りますと、新潟県民は非常にウェルカムな県民性であると同時に、実は排他的でもあるという一面があります。なかなか人と馴染めないところがありますが、しかしながら一端馴染めると、スッポンのように離さないといった、そういう所があると思います。この種の県民性は、いわゆる雪国新潟に特有の気候との関係もあります。東京から、結婚してはじめて新潟入りした私の奥さんも言っていました、大抵の方が「新潟は冬が嫌なんだわ」と言いますね。どんよりした冬の空は、毎日青空を見ている関東の人達には耐えられないようです。でも、「だから楽しく雪かきができる」のだと、私は言うんです。こんな風に、耐えている人の気持ちが良く判るというのも、新潟人のハビトウスではないかと思ったりしています。私はもともと新潟の人間なんですが、若い頃東京におりました。身体障がい者の人達ですとか、高齢者の人達、特に車いすの人達を外に出すという「生活圏拡大運動」を、積極的にしていました。新宿の駅をメジャーを持ちながら段差を測り歩いたりしました。当時小田急線の労働組合の方がこの運動にいろいろと提携・協力をしてくださいました。そんなことがありますと、何だか自分一人で社会を変えているのではないとかか錯覚するほどに没頭して、常に身体障がい者の方と一緒に行動しておりました。

その後新潟に帰りました。そして国際障がい者年の時に、ハンディキャップ・レクリエーション講習会を、一番最初に新潟で始めました。当時障がいを持った人達は、レクリエーションの対象になっていなかったように記憶しています。日本レクリエーション協会の上級指導者の方達も、障がいをもった人達にレクリエーションをやった記憶がないと言っておられました。高齢者の人に指導を依頼しても同様でした。そんな人を対象にしたレクリエーションはやらないといった答えがかえってきます。そんな時代でしたので、障がいを持った人達と一緒にレクリエーションをやるといっ

た発想そのものも、全然ありませんでした。

そんな折りでしたが、私はもともと知的障がいの方とか精神障がいをもった方のレクリエーションをやっていましたし、障がい者ともおつきあいがありました。ですから彼らがどんなことを考え、どんな風に工夫してレクリエーションを進めれば良いのかというノウハウを、皆さんにお伝えする活動をはじめた事になった訳です。

さて一緒になってそうした活動をする間に、色々な方との出会いがありました。たとえば障がい者の中に、全盲で卓球をする人がいました。その方は全盲でありながらダンスを教えるんですね。見えない人がどうやって教えるかという、非常に感覚的に教えるんです。誰か「目」の役割をする人がいれば、教える事が出来る訳です。視覚障がいの人は音感が優れているというようなことも言われますが、音痴な人もいます。当然ですが人によって違います。その人はたまたま、歌は駄目だけれど、踊ることは得意(好き)でした。このように一緒に活動していると、様々なことが判ってきます。

それから40代の脳性麻痺の方ですけれど、笑顔が素敵な方がいらっしゃいました。たまたまボランティア講座かなんかで講師をしているところをテレビで拝見したのですが、笑顔が素晴らしく、この人の笑顔は色々な人達を喜ばせる笑顔だなと感じました。それでお願いして、私の第1回目の講座に来ていただきました。たまたまアメリカでリハビリの勉強をしてみえた新潟大学の先生もその場にいらっしゃっていて、この先生の病院へも彼女と訪問したりしました。

彼女自身はどういった気持ちでいたのか、はじめは判りませんでしたが、ある時彼女から「私でもレクリエーションの指導者の資格がとれますか」と尋ねられました。「私も皆さんの前で指導してみたい」とうかがいしました。私の立場からしますと、障がいを持っている人は指導の受け手であり、その側の人の方が指導者になりたいなどと思うはずがないと思っていました。が、彼女の発言に目を覚まされました。「そうか障がいを持っている人が指導をしたって良いじゃないか」という具合です。逆に障がいを持っていることが取り柄になるということだってあるのです。こうした目覚

めがきっかけで、他の障がい者の方々にも、指導者資格がとれますよと言うほうが良いんだと気がつきました。「案の定、あの人には取れるなら私にも取れる」、と考える人がいっぱい出てきました。

ある資格をとった40代の方がウォークラリーを担当されたことがありました。みんなの前で説明しながら、自分もウォークラリーをやっていました。しかし自分がみんなの前で立たないと説明できない。そこでこの方は、先程のリハビリの先生の所に通いました。そしてとうとうある日、立てるようになったのですね。歩行機につかまりながら、皆さんに説明していましたが、本当に生き活きとされていたのが印象に残っています。彼女はその後、当時のテレビ番組11時の「今日の出来事」でしたか、その番組で取り上げられる程話題になりました。この事によって新潟の障がいをもつ人達も勇気づけられました。視聴覚障がいをもつ方々のグループも、指導者の資格取得を、目指すようにもなりました。

彼らの中には、「万代太鼓」という太鼓集団をつくって、自分たちも練習する人達もできました。聴覚障がいの人達は、空気の響きと自分たちの腰のリズムをとるということで音を揃えるのですが、技を磨いた彼らはやがてロシアにも招かれ、向こうの聴覚障がい者に対して演奏旅行をする等しました。中には途中で間違う人もいるんですが、何よりも一生懸命やっている姿というのは、たいしたものだと思っています。

先程西原さんの話にでた豊栄の地域総合型クラブの会場では、車いすの人達のバスケットボールチームが出来ました。そこでは脳性麻痺の人達ができるんだったら、自立損傷の人達も何かやりたいということで、福島県竹田病院でも以前にバスケットボールをしていた方を中心にチームができました。むかしの車いすというのは、今の最新型とちがって、スポーツタイプとはいうものの、操作が大変だったし、床にタイヤの跡がついたりすることもありました。そこで練習場所を確保するため、亀田という町に障がい者自らが声を出して「ふれあいクラブ」という場所を県に創っていただきました。障がい者のためのスポーツ、水泳や卓球などが出来る場所を、自からが獲得するようなことも生じております。

さて、私が勤務する学校は福祉レクリエーションの認定校ですので、出来るだけ彼らの学習成果を地域の中に還元させたいと思っています。昨年度から学会会長の鈴木先生がやっていらっしゃるスポーツクラブ協会で、要介護予防運動士について勉強をさせていただいています。それらを学びながら地域の高齢者の人達に学生達が地域や公民館で運動をしています。また施設に対しては課外実習と言うことでレクリエーション実習をしています。先日のことですが、そのソーシャル・ワーカーの方がお見えになりまして、学生達のその活躍ぶりを評価し、「こんな姿を見たのは初めてだ」と感激してメッセージをいただきました。

そんなわけで介護学科のレクリエーションは、グループレクリエーションはもちろん、特に個別レクリエーションを主体にした介護実習と併せて実習しています。児童福祉学科では、施設実習（障がい者施設実習を中心に対応しております。）でも個別レクリエーション援助の必要性を施設に理解してもらうのが大変困難です。集団を介したレクリエーション援助は理解されるのですが、個別レクリエーション援助となりますと、自分たちに馴染みがないし指導出来ません。それから見たことがないという理由で拒否をされることもあります。そういう施設には必ず私どもが訪問して、その主旨や内容をきめ細かに説明申し上げるようにはしています。

たとえば老健のある施設では、4人部屋で1人の学生が個別レクリエーション援助を実習した時の事ですが、回りの3人の方が「やきもち」をやくといった風なこともありました。これはどうなっているのかと、問い合わせがありました。その時もこの実習の主旨を施設に出向いてご説明し、周囲の皆さんの理解を得るようにしました。またこうした実習施設には、福祉レクリエーション講習会や施設職員の勉強会などの機会を提供するなどして、その成果を上げております。こうしたレクリエーションの必要性をきちっと伝えることが大切だと考えています。

そんなことで障がいを持っている人が、あるいは高齢者の人達が、楽しむといった、そういう雰囲気が出来てくると、どういう訳か脳性麻痺の方達がお笑い集団をつくりました。新潟には「なま

ら」というお笑い集団があるのですが、そこでは脳性麻痺の方とか、別の障がいを持つ方々が、「こわれ者の祭典」ということで、自分たちで漫才をやりたいという。動機は何ですかというときくと、「もてたい」からだと言います。そういう人達がでてきたんですね。

まあちょっと笑えないような、笑って良いのかどうかを疑いたくなるような内容もありますが、たとえば脳性麻痺の人は手が震えていますんで、お前はどんな商売人になりたいんだと聞くとですね。「オレは駅の切符を切る人になりたいな」「お前じゃ切符は震えていて切れねえナー」なんて話をするんです。まあおもわず顔を見てしまいます。そんな障がいも含めて自分たちをアピールするんだそうです。そういうお笑い芸をする方も出てきています。

私たちは、先程も出てきましたが、障がいを持っていても、高齢であっても、自分たちが社会の中で主体者としての目線を持つ、役割を果たすということ、それが出来る環境づくりを進める（支援する）ということ、その人達こそレクリエーションの担い手となるという方向性を持たなければいけないと思うわけです。そういう役割づくりをされなければ、新しい地域興しは出来ないということ、提案させていただきます。

**小田切毅一**：どうも有り難うございました。私は、日頃はハンディキャップ・レクリエーションのことを、身近に考える機会も少ないのですが、池さんから、障がい者主体の文化形成というあたりをお話いただきました。「なまら」のお笑い集団の出し物については、笑いづらいと私も感じました。ノーマライゼーションという点からも、中々興味深いお話を伺えたと思っています。ところで、皆さんいったん話し始めるとなかなか止まりません。必然的に時間が予定よりもかかっています。ちょっと急ぎ気味に紹介させていただきます。

最後に発言される上山寛さんは、建築家として幅広くご活躍の方です。ドイツやイスラエルなどでも、東京でもお仕事をしていたとか。そんな経歴からもわかるように、国際的感覚を身につけておられる方でもあります。特筆すべきは2003年のワールドカップ招致に際して、ボランティア事

務局長をなさった市民活動家であることです。本日は「市民ボランティアがつくりだす新潟の新しい都市づくり」というテーマで、建築家としての街づくりのかたわら、市民活動にのめり込んだあたりの経緯を、うかがえればと思っております。

**上山 寛**：新潟市内で建築設計事務所をやっております。今日はむしろ、仕事のことでなく一市民として、新潟にワールドカップがやってきて、新潟がどう変わったかということ、あるいは新潟の市民がワールドカップにどのようにかかわったかと言うことについて、画像(本稿では割愛)を交えながら発言させていただこうと思っています。

最初の写真ですが、前新潟市長の長谷川義昭さんが挨拶をされています。これはワールドカップの2年ほど前、1999年の暮れから翌年にかけて3回ほど「ワールドカップ市民懇話会」というのが開催されまして、ワールドカップを機に新潟市をもりあげる市民のアイデアを募りたいという集まりでした。そして「市民の皆さんの貴重な御意見を有り難うございました」と市長が挨拶をされ、3回目の会合がまさに型どおりに終わろうとしていた中で、1人の市民の方から、「ここに集まった人達が、私たち市民で、ワールドカップを盛り上げていきましょう」という主体的な発言がありました。これがまさに市民活動（運動）をスタートさせることとなりました。

早速2000年度に市民団体ができまして、「ウェルカム新潟」という名前に決まりました。市役所で開かれた記者会見風景です。左の方が会長の阿部さんです。反対側にいるのが私ですが、事務局長をやれと言われて、ここにいる訳です。

どんなことをやったのかというと、まず活動資金集めから、みんなでアイデアを出し合いました。最初にやったのは、シンボルマークを作ろうということで、専門学校とか大学ですとか、広く一般に呼びかけコンクールを行いました。その結果、約百件の応募がありました。この写真は選考会の模様です。次の写真はその授賞式の時のものです。デザイン専門学校の学生の作品が最優秀ということになりました。これがそのデザインです。賞品として盾と賞状が送られ、それから副賞として札幌雪祭りへのペアでの招待券が用意されまし

た。最初は国際旅行でラスベガスへとか、大きな夢のある話もありましたが、スポンサーの事情で結局は国内旅行になりました。このデザイン案を基にして、ピンバッチを作り1個500円で販売、そのうちの確か200円が収益になるという方式でした。新潟市には当時ワールドカップ対策室という部署が設立されました。その方々と協力関係をとりながら、市の会議室をお借りして、毎月1度の会議をしたりしました。

それからもう1つの活動としては、この写真はアルミのプレートですけれど、15センチ角のプレートを作ってお金を集めようと思いました。プレートには、「ようこそ新潟」へと書かれています。これを歩道に埋め込んで、試合に訪れた人達を歓迎しました。日本語の他に、お隣の韓国語や中国語、それに試合に来る国の言葉であるフランス語、スペイン語、クロアチア語などで「ようこそ新潟へ」と書いてあり、左下にシンボルマークをあしらい、右に新潟の万代橋と県花チューリップとビッグスワンの3つを選べるかたちでプレートを作成しました。買った人が言葉を選び、また購入者の名前も入れるようにしました。このプレートを2,002枚2002年に開催されるのだからという意味で作成し、先着順ということで、1枚5,000～6,000円としました。購入したプレートは市に寄付していただいて、それを新潟駅から南方へ弁天橋までの大通りの歩道に埋めて記念にするように考えました。今でも歩道を歩いてさえいただければ、当時のプレートを見ることができます。

その後も色々な活動を行いました。「ウェルカム探偵団」もそのひとつです。これは単なる観光案内ではなくて、新潟市でなければ無いというものを「こっそり案内する」という主旨のものです。たとえば新潟の縁日でしか見られない「ぼっば焼き」のような類のものを案内するようにしました。

ほかには案内ボランティアがあります。道案内する時にどんな案内が出来るかと、皆で話し合いました。たとえばトイレの場所はどこだという話題だとかです。色々な意見が出て、ある時なんかは「そんなことまで案内したらおせっかいだよな」という意見まで出ました。で、それをきっかけに、いっそのこと「おせっかいボランティア」という

名称にしようということになりました。この「おせっかい」という言葉は、語感としては、必ずしも良いイメージではないのですが、元来おとなしい新潟の人達はもっと積極的に行動すべしということで、敢えて「おせっかいの会」を結成しました。一般に呼びかけて挨拶やマナーなどの学習会などを開催したところ、およそ200名近くの方々が参加してくれました。

そしていよいよ当日がきました。外国人のサポーターを迎えているのですが、小学生が旗を持って歓迎しています。こういう外国人が1人また1人と現れました。駅前の広場がアイルランドの人達でいっぱい埋め尽くされます。丁度試合があった日の光景です。今思っても、こんなことが本当にあったんだろうかと、夢物語ではなかったのではないかと感激してしまいます。こういう光景を、私たちとしては手ぐすね引いて、外国からきた人達に新潟を楽しんでもらいたいと待っていました。私たちは、万代周辺の2カ所に本部をもうけました。黄色のキャップをかぶって待機しているボランティアの人達が、毎朝のミーティングをします。

サービス案内中には「宿ととれない」と相談にくる外国の方も多かったので、色々と宿をお世話しました。宿から、英語ができないからと、宿泊を断られたりしたこともありました。中にはボランティアの方が、それじゃ私の家にどうぞお泊まり下さい、と言う風なこともあったりしまして、より親密なコミュニケーションを楽しんだという話も聞きました。青いユニフォームを着たボランティアの方々もいましたが、これは私どもではなく、県で組織した方々の活動です。お互いに県も市も協力し合って活動していたわけです。

案内所で一番聞かれたこととして記憶しているのは、飲食ができて大会の映像が見られるような場所はないかというものでした。こうした場所の問い合わせについては、あまり想定していなかったもので、当初はとまどいました。探してみますとこのワールドカップを当て込んで、そうしたサービスをやっているお店「スポーツバブ」がかなりありました。そうした情報を手書きの紙でチラシにしました「おせっかいボランティア」の1人が作成したものです。小さくてもいいからテレビの

ある店が人気で、美味しいお寿司屋さんであってもテレビが見ることが出来ないと駄目でした。駅前の小さなラーメン屋さんなんかには人気が集中していました。みんなでワイワイ言いながら外国人の方々が飲み食いしていました。これもこのワールドカップの特徴です。海外からやってきたサポーターの方たちは、試合前のひと時、市内中心部で路上で群がって、自分たちのチームに声援を送ったりしていました。メキシコの方や、メキシコと対戦するクロアチアのサポーターの方も近くにいました。クロアチアのサポーターの方はいましたが、比較的には数は少なかったです。両国のサポーターが接近して向かい合った時など、何か問題が生じるのかと幾分緊張もしたんですが、「お互い明日頑張ろう」という風で、肩をたたき合い友好的な雰囲気でも、何も騒動など起こりませんでした。

「フーリガン」という暴力的・攻撃的なサポーターのことを耳にしていました。新潟にきたら暴れるんじゃないかという「うわさ」が先行していました。マスコミの人から「来たらどうしますか」と尋ねられた商店街の方々は、「シャッターを下ろして何とか乗り切る」という風でしたが、実際には何もありませんでした。そうした風評の中、新潟在住外国人の方々は試合後の余韻にひたり朝まで過ごせる場所として、新潟フェイズを借り切り「サムライ・ナイト」を企画しました。宿泊施設ではないんですが、外国からきた方々と日本の若者が一晩中過ごせる空間が確保されたことはプラスでした。入場料は確か2,000円だったかと記憶しています。結構朝まで交流が進められていたようです。当初は警察からも、危険性を指摘されたそうですが、首尾良く実施できたと考えています。

さて祭りがいったん始まれば、終わりがやってきます。大会が終了し1人去り2人去りと元の静けさが戻ってきます。ワールドカップは終わりました。ハレの舞台は終わったのです。

翌年には、中心になった人達で、解散式を行いました。記念植樹をしました。記念シンポジウムも開かれました。終了後の懇親会では参加して下さったボランティアの方々から、色々な意見ができました。「こんな充実した時はなかった、こ

のような機会があればまた参加したい」という意見が、圧倒的でした。外国語が出来るとか出来ないという問題ではなく、こういったことに参加して未知の人々とふれあい自分自身を生かしたことに充実感を感じた人が多いと感じました。

中には地元ばかりではなく、東京などから参加された方もいて、「交通費は出せませんがいいですか。」「それでも結構ですよ。」という具合に、毎回通ってこられた方々もいました。参加した人にとって、このボランティア活動は、まさに創造的な生きがい行動となっていたと思っています。こうした体験が日常的にあれば良いのですが。ワールドカップとまでいかなくともこのような機会が毎年新潟にあると、本当は良いですね。この20年ほど前にも、新潟でアジア卓球大会あり、同じように盛り上がりました。今後こういうボランティアの方々の力を結集するのは何年後になるのかなって、考えてしまいます。まったく未定ですし、もう来ないかもしれません。新潟に歴史博物館（みなとびあ）というのがワールドカップの後できまして、そこで案内ボランティアを募集したこともありました。そうしましたら応募した方は、とても1回のガイドンスでは間に合わないほどたくさん集まったようです。この種のボランティアをしたい方は、意外と多数いらっしゃる。これからはこの種の活躍の場を確保することが大切になります。それが街が元気になっていくひとつの方向じゃないかと思っています。

最後に一言、おりしも新潟がかかえている課題として、将来の北陸新幹線開通に伴い、都市の衰退が始まるとも言われる2014年問題への取り組みがあります。衰退を防ぐには新潟の対岸にあるロシア、中国、韓国など、近隣諸国との文化交流活動を戦略的な視点から積極的に推進するような、長期的展望が必要です。その中にレクリエーション活動を位置づけ、自然体の市民活動が誘発され、より魅力的な都市新潟が形成されていくことが求められています。

### 3. 質疑応答ならびに意見交換

小田切毅一：どうも有り難うございました。2002年以來の、ワールドカップ招致にかかわる市民活動の具体的事例というべきお話しをうかがいまし

た。こうした経緯の中にも、手法としてのレクリエーションが様々な工夫され、コミュニケーション力を高めるように機能していたことが理解できると思いながら聞いておりました。

さて予定より時間が経過してしまっておりま  
す。本当はこのシンポジウムのテーマに対する回答のようなものを、もう一度手短かに伺えると良いのですが、この辺りで**フロアとの質疑応答ならびに意見交換**に入りたいと思います。早速フロアの皆様に発言をお願いすることにします。

**師岡文男(上智大学)**：新潟が大変魅力的なところだなと感じたところです。たとえばフランスのリベロアという町の場合は、地域のクラブを充実させたところ、人口もそれに応じて集まってきたという風なことを聞いているのですが、スポーツやレクリエーションが気楽に出来る町というのは、多くの人が住む町になると思うのです。お話し聞いていると新潟は食糧自給率がとても高い。今後はこのことが、人が多く集まる町の条件になるようにも思います。お祭り好きな土地柄でもあるのかもしれませんが、いろいろ魅力を感じる町だと思いましたが、ただお話しをお聞きすると人口が減少傾向だということですね。また冬の薄暗い季節が嫌だというお話しでしたが、これはフィンランドやノルウェーだって同じだと思うんです。あちらでは長い冬を乗り切るためにもスポーツクラブがとても盛んな訳ですが、そうした北欧と同様な、新潟の一層理想的な状態への実現可能性のような事柄について、どなたかご発言くださいませんか。何故人口が減っているのでしょうか。この辺をまずお聞かせください。

**上山 寛**：人口が減るという問題は、余り正確かどうかはわかりませんが、一般的に大学進学率と関わって指摘される問題かと思えます。新潟の大学進学率は、かつては全国でも最悪の部類だったと思っています。若い人達がこの地に残ってこんなライフ・ワークをしていきたいといった選択の幅が狭いということかとも思います。大学受験を機に、東京や埼玉だとかに出て行って、そのまま帰ってこないというケースが結構多いのではと思っています。もっとも40～50代になって、故郷

に回帰する傾向も少なからずあるようですが、人口減少傾向の原因はこのようなことだと思えます。若い人達をどのように引きつけるかです。

**山崎律子(余暇問題研究所)**：新しい地域興しの手法としてレクリエーションを考える際に、豊かな歴史をもつ新潟があるとうかがいました。西原先生が先程「ハビトゥス」、つまり「新潟人的な」ということでしたが、文化時間だとか地域の特性だとかで、「これは良いぞ」というようなものはありますでしょうか。もしあれば、そこに着目して論議していくと良いとも思うのですが。

**井上弘人(熊本学園大学)**：関連する意見です。昨日は新潟の先生の案内で地域研究に参加させていただきました。色々と回りました。古い豪農の館や新しい医療福祉大学など、興味深い所を案内していただき有り難うございました。豪農の館ではそれにちなむ本を1冊購入しましたが、この新潟の地について色々と教えられる、緊張感のある生活に立脚した歴史的・文化的な出来事が書いてありました。

質問ですが、どうしてスポーツに焦点を当てて、この地域興しのシンポジウムをされたのか、お話しして頂ければと思います。

**小田切毅一**：まあ何と言っても、スポーツがらみの地域興しの問題は、社会的な大きなインパクトを与えている事象として、どなたでも了解していただけたと思いますので、今回はこのような話題にしました。

ただスポーツ以外の事柄を配慮しなかった訳ではありません。言い換えれば、文化や伝統や習慣にかかわる事象が地味で、地域住民の中で根づいている強い社会的インパクトを探ることが難しかった、ということでもあります。広く新潟県下には、たとえば村上の雛人形の展示ですとか、小地谷地区の牛の角突きなどははじめ、文化的な行事を思い起こします。ただ文化保存という形ではない現代の地域興しの話題性として、新潟市にかかわる重要な事象として見いだせませんでした。十分な応えになってはいないと思いますが。

**池 良弘**：新潟の魅力ですが、文化、伝統、習慣

のような多方面にわたりいっぱいあります。たとえば村上市の人形祭りというのは、家々に江戸の頃から代々伝わっている雛人形を、それぞれの家の前に並べて公開し、訪問者をもてなす行事です。そのほかにも「ゴゼ」と呼ばれる盲目の女性たちが、三味線をもって歌い伝えた魚沼地方、その街道沿いの風情ですとか、美空ひばりさんの唄にもあった角兵衛獅子の里も、良寛さんの里も新潟です。色々挙げれば沢山あります。

ただ言えることは、こうした文化財の広報活動については、いずれにせよ地味でピーアール下手だと言うことです。これも新潟の県民性に関わるものかもしれませんが、食べ物にしても同様です。たとえば茶豆やルレクチュ（洋梨）などの名物は、残念ながら、元々の産地新潟よりも、後から移植して伝えられた山形の産物の方が、現在では広く一般に知られています。

**鈴木秀雄（関東学院大学）：**西原さんが仰っている「光と影」への注目しようとする問いかけが大切だと考えています。

何故今地域興しかつという問題になれば、活性化だけに目がいくのではなく、その影にあるものが抱える課題をどうするかということが大切ですよね。内在化している可能性をどうとらえるかですね。総合型地域スポーツクラブにしても、文部省がパーッと活性化させたのですよね。加えて言うと大臣が告示として宣言しただけで、法律にはなっていないですよね。スポーツ健康法はまだ法律になってない。行政が先導して、金を使ってやる。兵庫県などはそのモデルのようなケースだと思っておりますが、それが必ずしも地域の個々の内情や課題と結びついていかないのですよね。西原先生、ちょっとその辺の問題状況について、ご意見をいただければありがたいです。

**西原康行：**ご指摘ありがとうございます。私もこの点については同様に考えています。この総合型地域クラブについては、もっと時間をかけて地域の内発的な力を育てる努力をしないと、行政が上から設置を働きかけるだけでは駄目だと考えています。先程鈴木会長のお話でありました兵庫県の場合でも、100%行政がつくっているんですが、

予算措置が無くなってしまったら、半分以上のクラブはつぶれてしまうのではと考えています。結局は住民が被害者になる訳です。あと先程師岡先生がおっしゃっていたお話しともかかわるのですが、一方ではある程度は行政がお金をださなくてははいけないと思っています。森川先生も報告されていた「共的セクター」、この種の企てにはおそらく、100年後の地域の繁栄を先取りして、レクリエーションやスポーツのお金を出していこうとする先見性があると思っています。新潟の長岡には、『米百俵』という話があります。貧しかったこの地では、大人が自分たちで食べてしまわずに、米百俵分のお金を子どもの教育に使ったというお話です。たとえばこういったお金のかけ方が、現代社会でも問われていると思っています。

**小田切毅一：**西原さんが話し終わったところで、丁度時間になりました。会場を見渡してみますと、何か発言したいという風な視線を、いくつか感じます。しかし後の予定もあるので、誠に申し訳ありません。この後の懇親会ですとか、あるいはロビーなどでも、この続きを個人的に再開していただけと思っています。

シンポジウムを企画した立場からしますと、今回は新潟という場所を意識していただく意味でも、こんな内容の問いかけをすることが、会員の皆様の積極的なご意見を伺う1つの機会になると考えました。全国からいらっしゃった会員の方々からすれば、自分の地域でこうしたローカルな問題を考える機会が、同じようにあるのではないかと考えています。ご自分の地域の場合には、レクリエーションにかかわる地域独特の文化・スポーツが話題になり、課題となるといったことがあろうと思います。

そんな会員の方々には、是非全国大会に名乗り出ただけで、ご自身の地域を題材にして熱のこもった議論を提示していただければと考える次第です。そんな気風があちこちから高まれば、学会としての新たな、求心的な動きも出てくるのではないかと期待しているところです。そんな期待をさせていただきつつ、このシンポジウムを終わりにしたいと思います。どうぞご協力ありがとうございます。(拍手)